

2022/10/17

このところ、球面上の渦の理論を定式化するのに時間を費やしています。球面といっても、メソスコピックのレベルのものです。マイクロ球面に超伝導体が張り付いたところに渦ができるわけで、いわば「マイクロの決死圏」で台風ができたと思ってください。台風の目玉が、たくさんできて、それが相互作用をするとどうなるかと、もとのアイデアは、だいぶ前からあったのですが、発表に値するほどの材料がなかった。ちょっと面白い材料が揃ってきたので、論文にするかと思っている次第です。しかし、表現の不備をみつけて、点検する作業が面倒です。映画のカットを編集する作業と、ある程度共通したところがあるかも。面白くない映画というのは、編集が下手くそなものが多いのではないかというのがわたしの持論。わかったようなことをいいました。

A さんへの通信

研究も続けていますが、さすがに、この年まで論文を書いているのは、あまりいなくなってきたようです。しかし、ロシア人というのは、ものすごいですね。ずっと昔から名前を知っていて、おそらく90を越したのがいまだにarchivで名前をみます。わたしもそろそろ、若い世代からは、そう思われているかも。しかし、若い連中のやっていることは、ほんとうにわからなくなってきました。じつのところ、彼らは、自分のやっていることを理解して論文を書いているのだろうかという疑念があります。研究費を放り出すために、怪しげな隠語をならべているとしかみえない。漱石のいう、刹那グソ???

ところで、ノーベル賞も、ついに「量子もつれ」なるものに行きましたね。どう思われますか。キワモノであると脇においていたのが、いつのまにか、堂々とまかり出てきたのには、もう降参です。量子力学の理論手法の正統的な習得訓練を、苦労しながら受けたものからすれば、ほんとうにお粗末な理論にみえる。ブラとケットの直積を足しただけで、あとは、延々と思弁をやっているかにみえる。あれはなんですかね。ノーベル委員会も世相を無視するわけにはいかなかった?? どのみち、一般人は内容など理解できるはずもなく。老人の愚痴を言ってしまうました。

2022/9/xxx

第3次世界大戦が、はじまるという「悪夢」が、かなり現実味をもってきた。まさか??? そう祈るのみです。

われわれは、いま戦慄の時間におかれているという状況を認識しなければなりません。「なにが、彼女をそうさせたのか」というタイトルの映画があったような。彼女を歴史におきかえれば、後世の歴史家は、そう分析するでしょう。

過去の大戦のきっかけをみると明らかです。特定の人物の、野望が、周りを巻き込んでいくという構図は、まさに当たっています。一番近いところでは、「火虎」ですね。(本邦では、そのミニチュア「トウジョウ」)。個人としては、なんの変哲もない男であるが、ある状況に置かれると、人間を動かす強力な能力を発揮して絶大な権力を作り上げる。しかし、ナポレオン・ボナパルトと、火虎と比べるべきではない。彼は軍人であった。軍人あがり政治をやるというのはまことに自然である。ジュリアス・シーザーしかり、オクタ비아ヌス然り。戦果をあげて、国を掌握したのであるから、だれも文句はいえない。もちろん軍人が国家を運営するというのは、時代錯誤であることはいまでもない。アレキサンダー、カエサル、オクタ비아ヌス、。。。ボナパルトは特別である。火虎は、皇帝ネロと比較すべきでしょう。風珍は、火虎(の小物)に対応するものでしょう。政治家は、だれでもなれる。特性のない男(Man ohne Eigenheit)になる職業である。宗教家と同根である。人をおかつく要素があればよい。学者出身で政治家になるのがいるが、本業で食い詰めたのがやる。学問で培った頭脳を政治という仕組みに応用するのである。娼婦でもやれる職業であるから、その気になればいとも容易い。コックや教師のほうが訓練がいる。

われわれの世代は、ちょうど、今次戦争の最終段階で登場して、大禍なく過ごせたのが、人生の最終段階に至って、また、悪夢を経験させられるかもしれないという状況が招来したというのは、なにをかいわんやです。まあ、よい時代を過ごせたという言い方ができるかもしれませんが。。。ただし、よい時代とは、なにかということが問題ですが。

人間の欲望が、嵩じてくると、なんかを作り出そうとする。それが、ものを対象とする間はよいが、作れないものがどうしてもある。それが領土である。人間の歴史は、領土拡大という一点にしぼられる。自分のところが、せまくなると、どうしても隣にを侵食することになるというのは、個人のレベルで起こることである。近隣トラブルである。ひどい場合は、殺人事件に発展する。これが、国家のレベルで生起すると、侵略とそれに続く戦争となる。現下のウクライナ侵略はまさにそれを示している。

領土拡大は、生物界の本能である。話は飛躍するが、物理学の世界でも、領土拡大は当然存在する。ただし、イデアの世界であるから、これは、イデオロギー論争となります。物理の世界で、イデオロギーがでてくるんですか？

然り、だれでもそう思うのが当然です。しかし そのとおりなのです。アイデアの世界でもなんでもやってよいという具合には行かない。かつて、栄華を誇った量子力学帝国も、陰りがみえてひさしい。その道の碩学たちも、ほとんど鬼籍にはいつてしまった。。。。

かつて、パウリが物理学の検閲官をやっていた。ランダウもそういう役割をした。彼らが目を光らせている間は、邪教がはいるスキがなかった。パウリ、ランダウがなきあと、次第に タガがゆるみはじめた。

そして、われわれの世代が、かつての パウリ、ランダウが慨嘆をしたまさにそのことに直面しているありさまです。彼らが、長命で、30年も長く存命であったなら、事態はもう少し、まして、物理学の規範が保たれてきたと思うとなんとも残念な気がします。

まあ、一言でいえば「なんでもあり」Everything is OK (=EOK).

いまから、40年近くまえに、素粒子論では、ストリング理論がはなばなしく登場し、およそ10年ほど席卷し、その後、結局物理の理論として、なんの結果も示すことなく、fading out していった。というのが、まともな素粒子学者のいづく実感であると思います。しかし、数学的理論として、無数の種に変異して、現在も第何十番目の世代でしぶとく生き抜いていることであると想像します。それを引っ張っていたのは、Edward Witten です。結局、彼の作った理論は、数理物理で終わった。

結局 やることが枯渇してしまった。「帝国の終焉」ということである。

そして、やるに事欠き、東条したのが、量子コンピュータ。。。。。。量子力学とは何の関係もないですぞ !!! 繰り返しいう。関係ないのだ。